

「理念」からの逸脱 アルカーヂイ・ドルゴルーキイ論

松 本 賢 一

はじめに

ドストエフスキイの長編小説『未成年』(1875)は20歳の青年アルカーヂイ・ドルゴルーキイの手記という体裁をとっている。この手記は、地主貴族ヴェルシーロフとその農奴(家僕)であるマカール・ドルゴルーキイの妻ソーフィヤとの間に私生児として生まれたアルカーヂイが(法律上はマカールの長子ということになっている)、その出生以後初めて産みの両親の側で暮らした約8ヶ月の間の出来事をその主な内容としている。ところが、事件の記述の合間合間にアルカーヂイの幼年時代の回想や、執筆時点での感懐が挟み込まれているために、一見したところではこの手記は様々な主題が煩雑に入り混じったまとまりのないものとなっている。それに加えて、「僕はこの手記を書きながら自分を再教育した」<13 - 447>⁽¹⁾とアルカーヂイ自身が手記の最後で認めているように、書き手であるアルカーヂイが出来事を想起し、それを書くことによって成長を遂げていくことを考慮に入れるならば、その過程は当然出来事の記述にも、また出来事に対して彼が漏らす感想にも反映していると考えなければならない。これらの理由から、『未成年』のテキストは混沌^{カオス}として立ち現われ、その全体像を掴むことさえ決して容易とは言えないのである。

本論では、主人公アルカーヂイの抱懐する「理念」の諸特質を、ドストエフスキイの他作品との関わりの中で検討することによって、彼の人物像をより明確に呈示したい。併せて、主人公の形象とその「理念」の特質が『未成年』という作品にもたらした構造上の特殊性をも指摘し、テキストの混沌に

一定の秩序を見出す一助としたい。

1. アルカーヂイの「理念」とガーニャ・イヴォルギンの野心

アルカーヂイ・ドルゴルキーはある「理念」()を持った19歳の青年⁽²⁾として読者の前に現れる。その「理念」とは「ロスチャイルドのような金持ちになる」<13 - 66> というものであった。小説全体から見れば比較的最初の方に置かれている第1篇第5章の中で、彼はこの「理念」を手記の架空の読者に解説している。

アルカーヂイによれば、「ロスチャイルドになる」という目的そのものの達成については「数学的に」保証されている。「すべての秘訣は次の二つの言葉にあるのだ、すなわち根気と持続である」<13 - 66、傍点部分は原文でイタリック>ただし、この単純な原則を「(ドイツ人によくいる勤勉型の家長 松本^{ファーテル} 父親」式に<13 - 66>ただお題目のように繰り返し、中途半端に実行しているだけではロスチャイルドになることは望み得ない。「真剣に」ロスチャイルドになりたいと望み、その望みによって「一気に社会の外に出てしまう」<13 - 66>ほど徹底して遂行することによってのみ目的は達成されるのである。大金を掴もうとしてリスクを犯したりはせず、僅かでもよいから確実に毎日何がしかの利益を得続けていれば、百万長者になれない筈はない。大金持ちになることを夢見ながらその夢を実現できない凡百の間は、アルカーヂイに言わせれば、「欲望と意志の力」<13 - 67>が不足しているのである。

「不断の規則正しい貯蓄、不断の観察と醒めた思考、節度、節儉、そして絶えず増大していく活力」<13 - 71>を備えていれば、必ずやロスチャイルドになることが出来る、とアルカーヂイは言う。この目的を達成するためには長年月にわたる修道院的な禁欲生活にただ一人で(家族を持つことは支出の増加に他ならないから)耐えるだけの性格の強さと意志の力が必要だが、自分がそれを持ち合せていることをも、この「未成年」は確信している。自分が粗食に耐え得ること、贅沢を慎み得ることについて、彼は既に実験を終えているのである。

ところで、もしもアルカーヂイの「理念」の目的が、単に巨額の富を掴む

ということにのみあるのならば、それは『白痴』（1868）の登場人物の一人であるガーニャ・イヴォルギンの野心と大差のないものになってしまう。ガーニャは不屈の精神によって財産を作り、「ユダヤの王」（ロスチャイルド）になるというおのれの夢をムィシュキン公爵に次のように語っている⁽³⁾。

「あなたはお考えでしょうね、私が(ナスターシャ・フィリップオヴナの持参金 松本)7万5千ルーブリを受け取ったら、すぐにでも箱馬車を買入れれるだろうと。とんでもありませんよ、そうなっても私は二年前の古ぼけたフロックを着るでしょうし、クラブの知己などは皆顧みなくなりますからね。わが国には辛抱強い人間が少ない、高利貸しなら沢山居ますがね、でも私は辛抱し抜こうと思ってるんです。ここで大事なのは、最後までやりおおせるということですよ これがつまり課題のすべてなんです！」 < 8 - 105 >

7万5千ルーブリの金を手にしても贅沢に走ることなく節儉に努め、目的を達成するまで「辛抱し抜く」つもりでいるガーニャは、ある意味でアルカーチイの先駆者とも言えよう。だが、洋服や靴の消耗を少しでも減らし、生活費をとことん切り詰める日々の積み重ねによってロスチャイルドに達しようとしているアルカーチイとは異なり、ガーニャは一足飛びに「資本」（ ）を欲する⁽⁴⁾。プーチン(後にガーニャの妹ヴァーリヤの婿となる刻苦精勵型の金貸し)的な努力を冷笑して、ガーニャは次のように続けるのである。

「僕ならそんな苦勞は一気に飛び越していきなり資本を動かすところから始めますね。15年もすれば皆が言うでしょう。「ほらイヴォルギンだ、ユダヤの王だ」ってね。あなたは僕が独創的なところのない人間だとおっしゃいましたね。いいですか、公爵、現代わが国において独創的でないとか性格が弱いとか、また特に才能もないありふれた人間だと言われることほど侮辱的なことはないのですよ。」 < 8 - 105 >

自分が「独創的」()であることへの彼のこだわりもまた、「月並み」()に対するアルカーヂイの嫌悪感と非常に似通っている⁶⁾。だが、ガーニャが独創的でありたいと願うのは、金銭の人間に対する支配力が一層強まっていく農奴解放後のロシアで、彼の最も身近な模範であるエパンチン将軍と同様に成り上がって行こうとするその上昇志向においてでしかない。アルカーヂイはロスチャイルドたらんとする希望そのものによって「社会から出てしまう」ことを考えているが、ガーニャは社会の中で独創的に見えることを、人が彼を指差して「ユダヤの王だ」としてくれることを望んでいるのである。心中ではアグラヤ・エパンチナに惹かれながら、7万5千ルーブリの持参金に目が眩んで、トーツキイの囲い者であったナスターシヤ・フィリップヴナと結婚しようとするガーニャは、「資本」を掴むためならばどのような陋劣な手段も辞さない。手段が陋劣であることと独創的であることは、彼にとって決して相容れない訳ではないのである。

ガーニャ・イヴォルギンの夢は「ユダヤの王」になるところで途切れてしまう。少なくとも作者ドストエフスキイは、彼がそのような夢を抱くに至った心理過程を懇切丁寧に描き出すことに価値を認めていない。ただ一般的な類型論の中で、自己満足に陥りやすい人に比べれば、「かなり頭が良い」ために、自分の独創性が絶えず気に掛かるタイプの一人として説明しているばかりである。<8 - 384 ~ 385>

「ロスチャイルドになる」というアルカーヂイの「理念」にはもうひとつ先の目的があった。というよりもこのもうひとつ先の目的を達成するためにこそ、彼には「ロスチャイルドになる」ことが必要だったのであり、この最終的な目的こそが、彼の「理念」の「根源」()なのだという。その「根源」はアルカーヂイの少年時代に遡る。ガーニャ・イヴォルギンに示した冷淡な態度とはうって変わって、ドストエフスキイは、アルカーヂイが「ロスチャイルドになる」といった一見余りにも世俗的な望みを抱くに至った過程を、アルカーヂイの口を通して読者に開示して見せる。

2. 「理念」のそして「地下室」の根源としての少年時代

地主貴族ヴェルシーロフとその家僕マカール・ドルゴルキーの妻ソフィヤとの間に私生児として生まれ、両親と離れて養育されたアルカーヂイは、早くから周囲の人間との間に深い断絶感を覚えていた。彼は次のように回想している。

12歳の時から、というのはつまり正常な意識の発生した時からだと思ふのだが、僕は人を愛せなくなった。愛せないというのとも違うが、なぜか僕には他人が耐え難くなったのだ。気分が晴々している時などは自分でも随分さびしい気がしたものだ。自分はおごく親しい人にすら胸襟を開いて話をする事が出来ない。しようと思えば出来るのだが、そうしたくなくて、何故か控えてしまう。自分は疑り深く、陰気で、交際下手だ。また、僕は早くから、ほとんど子供の頃から、自分の中のある特徴に気付いていた。僕はとても非難がましい、他人を非難する傾向がとても強いのだ。だが、この傾向が現れるとその後すぐに別の考えが湧くことがよくあった。それは「悪いのは彼らではなく僕なのではないか」という、僕にとっては実に重苦しい考えだ。この考えのために僕はどれほどしょっちゅう自分を責めたことだろう！こういった疑問の解決に苦しまずとも済むように、僕は自然と孤独を求めていた。おまけに僕は、どんなに努力しても（努力するだけはしたのだ）他人の社会の内に何ほどのものも見出すことが出来なかった。少なくとも僕の同年輩の者たち、僕の学校仲間といった連中は、皆が皆思想的に僕より劣っていた。ただ一人の例外も僕の記憶にはない。 < 13 - 72 >

他者への非難と踵を接するようにして生じる自己反省は、最終的な解決を与えないままに、罪悪感を伴った意識の堂々巡りをこの孤児同然の少年に強いた。彼が少年の頃から「孤独」を求めたのは、「意識」の強すぎる人間が他者と交わることによって経験せざるを得ない苦痛を免れるためであった。その際アルカーヂイ少年の孤独を保障してくれるのは、周囲の人間を自分よりも劣っていると見なし、自分が溶け込むことの出来ない社会を価値無きも

のと見なす一種の観念操作なのである。

ドストエフスキイの作品群の中では、『未成年』を遡ること11年前に書かれた『地下室の手記』(1864)の主人公が、アルカーヂイと酷似した少年時代を送ったことを告白している。「過度に意識するということは病気である。紛れもない、完全な病気である」< 5 - 101 >と主張するこの主人公は、自分の肉親や係累のことについてはほとんど語らない人物であるが、ある箇所、自分の少年時代を振り返っている。「孤児のような」< 5 - 139 >身の上だった彼は、遠縁の親戚たちによって学校へ「押し込まれた」。< 5 - 139 >この学校での生活を「徒刑」になぞらえて、彼はこのように回想している⁽⁶⁾。

友人たちは意地の悪い、容赦ない嘲笑で僕を迎えた。僕が彼らの誰一人とも似ていなかったからだ。(・・・)僕はすぐさま彼らに憎悪を抱いて皆から離れ、びくびくとした、辱められた、度を越えたプライドの中に閉じ籠もった。(・・・)まだ16歳なのに僕は彼らのことを陰気臭く眺めては驚いていた。その当時既に彼らの思考のちっぽけさや彼らの勉強ぶりや遊びやおしゃべりの愚かさが僕を驚嘆させていたのだ。彼らは必要不可欠なことを理解せず、心を動かし感銘を与えるようなものには興味を示さなかったので、僕は知らず知らず彼らを自分よりも劣ったものと見なすようになった。< 5 - 139 >

「手記」の執筆段階で既に40歳になり、「地下室」から毒に満ちた逆説を吐き出しているこの男とアルカーヂイが同一人物である訳ではもちろんない。しかし彼らは、学校という小社会の中で、強い意識のゆえに孤立し、他人を自分よりも劣っていると見なすことによって辛うじて自尊心を守ってきたという点で、その少年期においてほぼ同一の体験をしていると言える。

注意しなければならないのは、この少年時代についてのアルカーヂイの告白は、この段階ではすべてを物語ってはいないということである。自分が人間嫌いになり、「孤独」を好むようになった原因を、彼は自らの「性格」に帰しているが、法律上は農奴の子でありながら、実際には貴族の庶子であり、両親から引き離されて他人の中で暮らさねばならなかった彼の境遇がここで

大きな役割を果たしていたことを忘れてはいけない。『地下室の手記』の主人公にしてもアルカーヂイにしても生来の人間嫌いであった訳ではなく、アルカーヂイに即して言えば、その境遇は、むしろ人との交流に対する激しい欲求を絶えず呼び覚ましていた。「どうして彼らは率直に、開けっぴろげに近寄って来ないのだろう、そしてどうして必ず僕の方から自分で彼らに付き纏わなければならないのだろう？」<13 - 72> 子供のときから彼が自らに問い続けてきたというこの問いは、「意識」などという厄介な代物抜きで他者と交流したいというアルカーヂイの願望を端的に表していると言える。この願望は、成長してペテルブルグにやってきた19歳のアルカーヂイをも依然として捉え続けていた。人と交流しようという試みが常に後から苦い自己反省を伴うことを、子供のときからの経験で十分に承知しながらも、チェルガチョーフ宅で開かれた若者たちの集会で、アルカーヂイは「首に齧り付く」<13 - 47> 衝動に突き動かされ、長い孤独の中で守り育ててきた自分の心情を吐露し、挙げ句は自分が貴族の私生児であることまで話してしまう。アルカーヂイはすぐに自分の軽率を後悔しているが、その「理念」にも拘らず、他者と交わりたいという強い欲求を保持しているところに彼の性格の大きな特徴があるのである。

3. 愚かしい「夢想」と理性的な「理念」

人と交わりたいというやみ難い欲求を持ちながら、「意識」に妨げられてそれを実現できなかったアルカーヂイ少年は、逆に自分が他人に優越していると「意識」することによって、「孤独」のうちに少年期を過ごしてきた。「孤独」の中で彼は様々な「夢想」に耽るようになる。この夢想癖においても、アルカーヂイは『地下室の手記』の主人公と著しく似通っているが、彼が地下室の逆説家と異なっているのは、それらの「夢想」のひとつをやがて実現可能な「理念」へ育てていく点である。

そうだ、僕はこれまでの人生の中で強さを、強さと孤独とを渴望してきたのだ。僕の頭蓋骨の下に何があるかを見て取れば、誰だって僕のことを面と向かって嘲笑するような、そんな年頃からでも、僕はこ

のことを夢想していたのだ。(・・・)そうだ、僕は全力で、お喋りなどしている暇が無い位に夢想していた。(・・・)僕がとりわけ幸福であったのは、床に就いて毛布にくるまり、誰も周りを立ち歩かず、誰も物音を立てないような時に、全くの一人ぼっちで、一人で人生を別の形に作り変える時だった。実に烈しいこの夢想癪が、「理念」を発見する時まで僕に付いて回ったのである。そしてそのとき、ありとあらゆる夢想は、愚にもつかないものから一挙に賢明なものとなり、小説めいた夢想的形式から現実の理性的な形式へと移行した。

すべてはひとつの目的へと溶け合ったのである。 <13 - 73 >

「ロスチャイルドのような金持ちになる」という「理念」は、実は「強さと孤独」を手にするための手段に他ならないのだという。「強さと孤独」を手にするために、孤独な寝床の中で彼によって夢想された別の人生の数々は、彼が自分で述べるように「愚にもつかない」「小説めいた」ものであったに違いない。だが、「ロスチャイルドになる」という夢想だけは、「賢明」で「現実の理性的な形式」を備えた「理念」にまで成長し得たのである。富が現実において発揮する力について、アルカーヂは正確に、「理性的」に認識している。

金こそは取るに足りない人間を首位に導いてくれる唯一の道である。まさにその点に僕の「理念」は、僕の「理念」の力はあるのだ。(・・・)もちろん金というものは専制的な力だ、だが、それと同時に最高度の平等でもあるのだ。この点に金の主要な力があるのだ。金はすべての不平等を均してくれる。 <13 - 74、傍点部分は原文でイタリック>

とはいえ、この程度の認識ならば、ガーニャ・イヴォルギンのような人物でも持つことは可能である。門地や階級が社会における実質的な力を失いつつある時代において、金こそが上昇のための唯一の方策であると考えているからこそ、「ユダヤの王」になることを彼は夢見ていたのである。自分の

「理念」が金の力を頼りに社会の上層に浮かび上がることを最終目的にしているかの如く受け取られることを恐れて、アルカーヂイは急いで釈明する。自分が「強さ」を求めるのは人を抑圧したり、私生児という自分の境遇に復讐したりするためではない。そんなことは「月並みな人間」() <13 - 74> のやることであり、自分の「理念」の目的はそのようなところにあるのではない。

僕は金を恐れはしない。金に抑圧されたりはしないし、金に強いられて人を抑圧したりもしない。

僕には金は必要ではないのだ、いやより正しく言えば、僕に必要なのは金ではない。強さでもない。僕に必要なのはただ強さによって得られるもの、強さによってでなければ決して得ることの出来ないものなのだ。それは孤独で落ち着いた力の意識だ！これこそが、世界がそのためにかくも苦労している自由の最も完全な定義なのだ！自由！僕はとうとうこの偉大な言葉を書き付けてしまった・・・そうだ、力の孤独な意識、これはなんと魅力的で素晴らしいことだろう。 <13 - 74>

金によって保障される「力」が自分の掌中にあるという「意識」だけでアルカーヂイは満足出来る。その心情は、彼が自分で明かしているように、プーシキンの『吝嗇の騎士』(1836)における老男爵のモノローグ 「私にはその意識だけで十分だ」 と同じものであると言えよう。だが、「意識だけで十分だ」と言いながらも、この吝嗇漢の老人は自分の溜め込んだ金を手放すことはなかったし、それゆえに悲劇的な最期を遂げなければならなかった。手中にした「力」を行使するか否か、金をどのように使うか、また使わないかについての決定を保留し、自分には「力」があるとひとりで静かに意識している状態に「自由」を見出しているアルカーヂイは、吝嗇の騎士がそうであるように「金に抑圧されたり」、「金に強いられて人を抑圧したり」はしない。彼の「自由」は、ロスチャイルド並みの富を手にした後で、その富を惜し気も無く投げ出すことさえ包含している。たとえそのことによって、

乞食に等しい身の上になったとしても、「かつて自分の手中に数百万の金があり、それを自分は下らないもののように、泥濘の中に投げ捨てたという意識だけでも」 < 13 - 76 > 彼は生きていけるのである。

「理念」の説明の最後にあたって、アルカーヂイはほとんど陶然となって書き記している。

そうだ、僕の「理念」は(・・・)どんなときでも常にすべての人から身を隠すことの出来る要塞なのだ。これこそが僕の詩なのだ！ < 13 - 76 >

最初に述べたように、アルカーヂイは「手記を書きながら自分を再教育した」のであり、彼によって想起され、書き留められる事象は、執筆時点でのアルカーヂイの視点によって捉えなおされ、変容を余儀なくされていると言わねばならない。しかしながら、自らの「理念」を架空の読者に説明する際に、彼は「理念」を含めた当時の「思想」を「当時の形式で、つまり今ではなく、当時僕の中で形成され考えられていたように叙述しなければならない」 < 13 - 65 > と自らに戒めている。この言葉を信じるならば、実父ヴェルシーロフを中心とする嵐のような出来事に巻き込まれる以前のアルカーヂイは、まさにここに見たような「思想」や「理念」を抱えてペテルブルグに、小説『未成年』の舞台に出て来たのであった。

4 . 「理念」からの逸脱

中学校卒業と同時に、「理念」を実行に移すべく「すべての人とすっかり縁を断ち切ろう、もし必要なら全世界とさえ縁を断ち切ろう」 < 13 - 15 > と決心したアルカーヂイは、実父ヴェルシーロフからの誘いを受けるとたちまちその決心を翻し、ペテルブルグに出ることに同意する。ヴェルシーロフの招きに応じた理由として、アルカーヂイは、10歳の時に自分に鮮明な記憶を残した父の実像を確認したいという思いと、自分が所持しているアフマーコヴァ夫人の醜聞に関わる書類を用いて「他人の運命の支配者かつ主人として」振舞いたいという欲望を抑えきれなかったことを挙げている < 13 - 16 > が、

すぐにでも実行に移す筈であった「理念」については、彼は次のように自分を納得させている。

何が起きるか見てやろう。(・・・)いずれにしても僕が彼らと関わりを持つのはほんの一時だけのこと、場合によったら、ごく少しの間のことだ。この一步は条件付きのちょっとしたものだが、もしもこの一步がやはり僕を大事なことから遠ざけるものだと分かったら、僕はすぐに彼らと縁を切って、何もかも投げ出し、自分の甲羅の中に立ち去ってしまうのだ。(・・・)たとえ彼らが僕の気に入ったとしても、たとえ彼らが僕に幸福を与えてくれることがあったとしても、僕の理念は僕と共にあるだろうし、僕はそれを裏切ったりはしない。 < 13 - 15、傍点部分は原文でイタリック >

「彼ら」の中で暮らすために、アルカーヂイは「大事なこと」を、すなわち「理念」の実行を先送りにしたのである。これはたとえば、自分の「理念」が正しいか否か、いやそもそも自分の「理念」とは如何なるものかを自分自身にすら明確に出来ないうちに、現実生活の諸力に押されて犯行を犯してしまったラスコーリニコフとは大きな相違である。手記を執筆し、「自分を再教育」している20歳のアルカーヂイは、ペテルブルグに出て来る時の自分のこのような状況を、計画や目的の「二重性」 < 13 - 16 > と評し、この二重性こそが、自分が仕出かした失策や醜行の「主たる原因のひとつ」だったと反省している。しかし、後で述べるように、この「二重性」こそが実はアルカーヂイを救ったのである。

小説の第2篇になると、アルカーヂイは「理念」から完全に逸脱してしまう。ペテルブルグに出てきてから1ヶ月の間は、アルカーヂイは「彼ら」と共に過ごしながらも「理念」に則した生活を崩すことはなかった。ところが第2篇の冒頭で(第1篇と第2篇の間には2ヶ月の時が流れている)読者の前に登場する彼は、上等の仕立屋に服を作らせ、有名レストランで食事をしたり、専従のお雇御者の馬車を駆り、第1篇で親しくなったセリョージャ公爵の家に入り浸ったりしている。「理念」のために洋服や靴の消耗を極力少

なくするように努め、食費も切り詰めていたあの青年の面影は、少なくとも「外見からは」<13 - 163> 消え失せている。アルカーヂイにこのような生活が可能になったのは、第1篇の終わりでヴェルシーロフに対して抱いていた不信感が一時的に払拭され、ヴェルシーロフの裁判相手であったセリョージャ公爵からヴェルシーロフの取り分2万ルーブリのうち幾許かを「父の金」として引き出しても構わないと考えたからであるが、それと同時に彼の「理念」がこの生活を許したからでもあった。

手記を執筆している現在のアルカーヂイは、セリョージャ公爵から借りた金が「父の金」ではなかったことを知っているが、仮にそれが「父の金」であったとしても、自分のこのような変化を「下劣な振る舞い」であり「恥」であったと後悔している。だが問題は、既にその当時から、彼が「自分で自分の墮落を意識していた」点にある。

(墮落を意識していても 松本)それでもやはりこの2ヶ月の間ずっと僕はほとんど幸福だったのだ いやどうしてほとんどなどと言うのだろうか？僕は幸福すぎる位幸福だったのだ！いやそれどころか、時折り(実に頻繁に！)ちらついて僕の魂を戦慄させる恥の意識が信じてもらえるだろうか？ この恥の意識が僕をさらに一層酔わせていたのだ。「構うものか、墮ちるなら墮ちるが良いのだ。墮ちきってしまったりはしない、また浮かび上がれるさ！僕には星があるのだから！」(・・・)だが「理念」は？「理念」は後回しだ、理念は待ってくれていた。この頃あったことはすべて、「どうして自分を少しばかり楽しませちゃいけないんだ？」という「ほんのちょっとした脇への寄り道」だった。もう一度繰り返すが、ありとあらゆる寄り道を無条件で許してくれる点で、この「僕の理念」というやつは醜悪なのだ。もしもこの理念があれほど堅牢で根源的でなかったら、僕は恐らく寄り道することを恐れただろう。<13 - 163~164>

自分に「星」、すなわち「理念」がある限り⁷⁾、「墮ちきってしまう」うことはないという自らの良心を宥めながら墮落に身を委ね、自分が恥ずかしいことを

しているという意識そのものに愉悦を見出しているアルカーヂイの状態は、彼と同様の少年時代を持つ『地下室の手記』の主人公が、安っぽい淫蕩に耽りながらも「美にして崇高なるもの」の夢想を「高潔な抜け穴」もしくは淫蕩に添える「ソース」にさえしていた< 5 - 133 > のと同様の心理的なメカニズムに支えられている。20歳のアルカーヂイはこの時のことを振り返って「自分は木っ端で出来たか細い、手摺りの無い橋で深淵を渡っていた」< 333 > と形容しているが、もしも彼がこの状態に慣れてしまえば彼は深淵へと、「地下室」へと駆け込んでいたであろう。彼にとっての救いは、この後彼が仕出かす様々な醜行(その最たるものは自分の持っている「文書」を用いてアフマーコヴァ夫人を我が物にしようと考えたことである)に「理念」が無関係であり、彼の「寄り道」を「待ってくれていた」点にある。

5. 「理念」の本質

「理念」から完全に逸脱した生活をおのれに許したアルカーヂイは時にその「理念」を誹謗することさえしている。「理念は後回し」であることを述べた上の引用部分の少し先で、彼はこのように述べている。

「それにどういう訳でああいった以前の陰気さが必要だというのだ？ と僕は有頂天になっている時には思ったものだ。昔の病的な興奮や、一人ぼっちの憂鬱な僕の幼年時代や、毛布の下での愚かしい夢想の数々や、誓いや計算や、それにあの「理念」だって一体何になるというのだ？僕はあんなことをうんと想像したり考え出したりしたが、世間というものは全く違うじゃないか。このとおり僕は喜ばしく楽しい気分にいる。僕には父がいる、ヴェルシーロフだ。僕には親友がいる、セリョージャ公爵だ。それにまだいる(・・・)」< 13 - 164 >

自分が「理念」から離れていることへの自己弁護として、「墮落」の只中にあつたアルカーヂイを時折り訪れたこの思いは重要なことを物語っている。第2節で確認した限りでは、アルカーヂイの「理念」は両親から引き離

され、人との交わりを渴望しながらも「意識」に妨げられて「孤独」に閉じ籠もらざるを得なかった彼の幼年時代に「根源」を持っていた。それが今、自分にとっては遠い存在であったヴェルシーロフとの間に親子の絆を確認し、あれほど求めても得られなかった親友を得、そしてここでは言葉を濁しているが崇拜する女性までも持つ身となったアルカーヂイにとっては、「理念」はおろかその「理念」の母胎であった孤独な幼年時代の思い出も意味のないものとなってしまったのである。第1篇第5章で「理念」を説明した際にアルカーヂイは「トゥシャールの塾で僕をあれほど怒らせた私生児という境遇や、佻しい幼年時代や復讐や抵抗の権利が僕の「理念」の根源だったのではない」<13-72>と断わっているが、父が与えられ、親友が与えられ、そして恋人さえもが与えられた時に「理念」の魅力が薄れるとすれば、彼のこの言葉を信用することは出来ない。アルカーヂイ自身も気付かぬうちに、彼の「理念」は「私生児という境遇や、佻しい幼年時代」の代償となっていたのである。

しかしながら、アルカーヂイの「理念」からの逸脱を、「首に齧り付く」衝動の発現と、また、疎外されていた社会(家族と友人)への復帰とみなすだけでは十分ではない。彼が単なる私生児ではなく、貴族と農奴の妻との間にうまれた私生児であることを考慮に入れなければ、「未成年」という作品の極めて重要なテーマのひとつを見落とすことになる⁽⁶⁾。アルカーヂイをして「理念」に反する生活に沈淪せしめたもうひとつの要因は、彼の中にある貴族階級への憧憬なのである。

第1篇第6章でアルカーヂイはヴェルシーロフに向かい、自分がどれだけ父をあこがれ求めていたかを告白する。その告白の中で彼は自分が放り込まれていたトゥシャールの寄宿学校での出来事に言及するが、「理念」の「根源」としての幼年時代を架空の読者に向けて語ったときのあの抽象的な装いは、ヴェルシーロフという具体的な人間を前にして取り払われる。公爵や元老院議員の子弟ばかりが学ぶこの寄宿学校で、貴族ヴェルシーロフの血を受けながら農奴身分であるアルカーヂイは、経営者のトゥシャールから徹底した「下男」扱いを受ける。自分の境遇がどのようなものであるかも理解していない10歳ばかりのアルカーヂイの髪を掴み、引き摺りまわしながらトゥシ

ヤールが言った言葉は次のようなものだった。

「貴様は名家の御息子たちと一緒に座ることなどできん、貴様は卑しい生まれの子で下男にも等しいのだ！」 <13 - 97>

毎日のように続くトゥシャールの打擲から逃れるために、幼いアルカーヂイがとった手段は、進んで相手の「下男」になることであった。教師トゥシャールによるアルカーヂイの「下男」扱いは日常化し、他の子供たちにも伝染していった。9月のある日曜日の夜、アルカーヂイは寄宿学校を抜け出して父のもとへ行こうと決心するが、扉の向こうに広がる「果てしない危険な未知」の世界に恐れをなし、逃亡を諦めてしまう。

「自分は下男であるばかりか、その上臆病者なんだと意識したこの瞬間から、僕の本当の正しい発達が始まったのですよ！」 <13 - 99>

ヴェルシーロフを父としながら、自分の苗字がドルゴルーキであることの意味さえ理解出来なかった少年は、自分が貴族ではなく、身分においても精神においても「下男」であることをこの寄宿学校で否応なく意識させられたのである。自分が人を愛せなくなったのが12歳頃で、それはちょうど「正しい意識」の芽生える頃だとアルカーヂイが記していたことを考え合わせれば、このトゥシャールの寄宿学校での経験が、彼のその後の人生に、「正しい発達」に、そして「理念」の「根源」にどれほど大きな影響を与えていたかは明らかであろう。彼が「孤独」と「強さ」を求めたのは、「自分は下男で臆病である」という彼の自己認識からの「正しい発達」の結果であった。確かにタチヤーナ・パーヴロヴナが言うように、ヴェルシーロフはアルカーヂイを靴屋奉公に出したりはせず、貴族の子弟と同じように教育を受けさせたが、そのことは人生の最初に「自分は下男なのだ」という意識を持たねばならなかったアルカーヂイにとって何の償いにもならない。「僕にヴェルシーロフをまるごとくれ、僕に父をくれ」 <13 - 100> とアルカーヂイが言うとき、その声には産みの父の渴望だけではなく、ヴェルシーロフとの絆の回

復によって「自分は下男だ」という意識を打ち消したいという願望が響いている。自分が下男でないことが確認されれば、少年時代の傷は癒え、「理念」はおろか「毛布の下」での諸々の夢想も雲散霧消してしまうのである。アルカーヂイが名誉ということに敏感であるのも、他人に人もなげな扱いをされると激しく腹を立てるのも、「自分は下男でありたくない」という彼の隠された願望によるものであると言えよう⁽⁹⁾。「貴族ヴェルシーロフの息子」として、セリョージャ公爵のような「名家」の人々と交友し始めるや「理念」を不要物と見なしてしまうアルカーヂイにとって、「理念」は彼の貴族階級への憧憬の代償物でもあった⁽¹⁰⁾。

6. 「理念」からの逸脱と作品の構造

K. モチュースキイは、『未成年』第1篇の終りでアルカーヂイが父を獲得したことは、彼の「生への、幸福への、そして信仰への回帰」を意味していたとし、「孤独と力」は終りを告げた、ロスチャイルドの理念は終りを告げた、腐臭漂う地下室は終りを告げた、若い生命は夢想癖という病に打ち克った。アルカーヂイは復活するのである」と述べている⁽¹¹⁾。しかしながらこれはアルカーヂイにおける「理念」からの逸脱を「理念」の放棄と見なし、作品の第2篇以後と「理念」の関連を過小評価した指摘だと言わなければならない。確かに、アルカーヂイは父を得、友や恋人を得、そして自分を「下男」と見なす必要のない生活を得ることと引き換えに、これまでそれらの代償であった「理念」を離れてしまった。だが、小説の第2編以後は、「理念」と引き換えに得たと思ったものに対してアルカーヂイが幻滅していく物語なのである(その中には自分の内に「蜘蛛の魂」<13 - 307>、すなわち強い情欲が蠢いていることや、自分もまたアフマーコヴァ夫人を脅迫しようとしたランベルト同様の卑劣漢たり得るという自覚も含まれていよう)。E. セミーノフが言うように、アルカーヂイの「理念」は「その堅固さや合理性においてラスコーリニコフの立論の土台よりもかなり後退した土台⁽¹²⁾」の上に築かれているとはいえ、それはこの作品が同じ作者の後期長篇群よりも後退していることを意味しない。『未成年』における主人公の「理念」の位置付けは、たとえばラスコーリニコフやイヴァン・カラマーゾフの「理念」の作品

における位置付けとは最初から異なっているのである。後者二人は自らの抱える「理念」(ラスコーリニコフの場合は「非凡人には法や血を踏み越える権利がある」という「理念」、イヴァンの場合は「神がなければすべてが許される」という「理念」)を現実の生活で実地に検証することを強いられ、自らの「理念」の正しさに疑念を抱かざるを得ない状況に追い込まれる。ラスコーリニコフやイヴァン・カラマーゾフの物語が悲劇的性格を強く帯びているのは、人間の理知によって生み出された堅牢な「理念」(もしくは「理論」)が、現実という形をとった、人知を超えた運命によって翻弄され、その弱点を露わにしていくからに他ならない。しかしながら、アルカーヂイ・ドルゴルキーにおいては、彼が手記の最初で確信に満ちて披瀝した「理念」そのものが現実によって検証されることはない。たとえそれが偽りのものであるにせよ、現実が「理念」なしで生きる可能性を彼に与えたからである。アルカーヂイが小説全篇の中で苦しんだり、焦慮したり、絶望したりするのは別のことにあって、自らの「理念」の正否についてはない。自分の身に起きたすべてのことを記録したアルカーヂイは、手記の最後で、自分には新しい生活が始まるのだと記し、更にこう述べている。

もしかしたら、読者の中には知りたい人がいるかも知れない。僕の「理念」はどこに行ってしまったのか、そしてこのようになぞめかして僕が宣言した、僕にとって今始まった新しい生活とはどのようなものなのか？しかしこの新しい生活こそが、僕の前に広がったこの新しい道こそが、僕の「理念」なのだ。それは以前のものに他ならないが、しかしもはや全く違う姿をしていて、それゆえお知らせするわけには行かないのだ。 <13 - 451>

「全く違う姿」をしているが「以前のものに他ならない」理念が何を意味するかは明らかではない。「理念」が何らかの変容をこうむっているとすれば、それは実父ヴェルシーロフの悲劇的な分裂と法律上の父マカール老人の「端正さ」()の両方を親しく見聞したアルカーヂイ自身の変化によるものであろうが、それがいかなる変化であるかについて彼は明言し

ない。しかしアルカーヂイが離れている間も、「理念」がその生命を失うことなく、彼を「待ってくれた」ことだけは確かである。「理念」が生活そのものとなった今、アルカーヂイが「理念」から逸脱することはあり得ない。アルカーヂイが幸運であったのは、孤独の中で守り育てて来た「理念」を現実生活に適用する前に猶予期間が与えられていたことである。彼に手記の感想を求められたかつての養育者、ニコライ・セミヨーノヴィチの「時代は未成年たちによって作り出されるのです」という言葉が作者自身の言葉であるならば、この猶予期間こそは作者によってこの「未成年」に与えられた賜物であると言えよう。ドストエフスキイのアルカーヂイに対する好意と期待は、最後の作品『カラマーゾフの兄弟』のアリョーシャと同じ「薔薇色の頬」〈13 - 73〉をアルカーヂイが持っていることにも表れているのである。

注

- (1) ドストエフスキイからの引用はすべて . . . , 30- . . . , 1972-1990.によるものとし、煩雑を避けるために本文では〈 〉内に巻数と頁数のみを記した。
- (2) 手記を執筆しているアルカーヂイは既に20歳になっているが、小説内の時間では彼はまだ19歳である。
- (3) 「ユダヤの王」になりたいというガーニャ・イヴォルギンの言葉についてアカデミー版全集の『白痴』注釈者(H.ソローミナ)は、ムィシュキン公爵がキリストになぞらえられていることとの関連で福音書に典拠を求め、また、「ユダヤの王」がロスチャイルドを指すことについてはゲルツェンの『過去と思索』やハイネの『ドイツ宗教哲学史』における使用例を示しているが、アルカーヂイの「理念」との関わりについては言及していない。〈9 - 399~400〉
- (4) 日々の積み重ねによってではなく、一挙に一財産を手に入れようという志向そのものは、『罪と罰』のラスコーリニコフにも似通っている。出稽古で「びた錢」を稼ぐことをやめ、屋根裏の下宿に逼塞してアリョーナ殺しの「呪われた夢想」に心を悩ませている彼は、女中のナスターシャに「あんたはいっぺんに一財産要るんだね？」〈6 - 27〉と揶揄される。
- (5) 一例を挙げれば、アルカーヂイは次のように吐き捨てている。「その上、僕はまだモスクヴァに居る頃から、いやひよっとしたら「理念」の生まれた最初の日か

ら、質屋や高利貸しにはならずにおこうと決めていた。そういう仕事にはユダヤ人や、ロシア人の中でも頭や性格の無い連中が居る。質草だの利子だの 月並みな仕事()だ。」<13 - 69>

- (6) 『地下室の手記』と『未成年』に共通する学校での疎外感についての記述が、ドストエフスキ自身の経験(チエルマークの寄宿舎)に由来するものであることは疑いを容れないが、それが強制された集団生活という点で「徒刑」になぞらえられていることは、ドストエフスキ自身のシベリア体験の実情を示唆するものとして興味深い。
- (7) 「星」()には、「運、幸運」という意味があるが、ここでは文脈から「理念」を指していると判断し、そのまま「星」と訳した。
- (8) ドストエフスキが「偶然の家族」を農奴解放後のロシアの顕著な現象と捉え、『未成年』においてそれを描こうとしたことは周知の事実だが、E.セミョーノフによれば、農奴解放後の軍制改革によって自分たちが独占していた諸権益や、国家体制の中核の位置を「民衆の中から少しずつ成長してくる下層士」たちに奪われることを懸念した保守的な貴族層の反解放キャンペーンをもドストエフスキは視野に取り込んでいるという。(. . . , " " , , 1979, 15-35) 貴族を父に、解放前の農奴を母に持つアルカーヂイの姿を未来を担うものとして提示することは、そのようなキャンペーンに対するドストエフスキの態度表明なのである。
- (9) このことが最もよく表れているのは、第3篇第9章で描かれるアルカーヂイと異母兄(ヴェルシーロフの先妻との間の息子)との最初の出会いであろう。私生児とはいえ、自分もまたヴェルシーロフの息子である以上、兄とは貴族同士の対等の会見が出来ると考えていたアルカーヂイは、兄と「同様の^{バーリン}旦那」である自分が、「下男たちの居る玄関の間で腰掛けたりすることは無作法であり、またあり得ないこと」だとさえ考えていたが<13 - 399>、兄と下男たちが徹底して非礼な態度を取ったことに逆上し、彼らを「下種」呼ばわりするに至る。手記を執筆している時点でもアルカーヂイは「僕にとってこのことは傷であった その傷は今もなお、僕がこれを記し、もはやすべてが終りを告げて復讐さえ遂げられている今この瞬間でもまだ癒えていない」<13 - 400>と述べている。
- (10) 本論の主題から逸れることを承知で敢えて付言しておくならば、アルカーヂイの貴族階級に対する幻想を打ち砕き、既成の貴族階級が憧れるに足りないものであることを最もよく示しているのはセリョージャ公爵である。この名門貴族の末裔は、エムスにおいてアフマーコヴァ夫人の義理の娘を誘惑し、妊娠させて捨ててしまったという過去を持ちながら、今度はアルカーヂイの妹リーザ(アルカーヂイ同様ヴェルシーロフの私生児である)と恋愛関係に陥り、彼女を妊娠させてしまう。貴族の私生児であることの悲しみを身をもって知っているアルカーヂイにとって、やはり私生児である妹が、母と同じ運命を辿りつつあるという事実は

耐え難いことであつたに違いないが、それよりも彼にとって屈辱的であつたのは、自分がセリョージャ公爵から受け取っていた金が「父の金」ではなく、妹リーザを妊娠させたことに対する慰謝料であつたということであろう。また、株券の偽造に関与したために脅迫され、1万ループリという金を作らなければならない公爵のために、アルカーヂが窮余の策としてルーレット賭博を提案した時、公爵はしぶしぶ同意しながらもそれを「下男式の解決法」と呼び、自嘲気味に「下男のように振舞ってやろう」と嘯いている。<13 - 265>彼は表面的にはアルカーヂと対等の付き合いをしているように見せかけているが、実際には、アルカーヂが卑しい農奴の女の子「下男に等しい」人間であり、自分是由緒正しい貴族であることを片時も忘れられないのである。

(11) . , , YMCA-PRESS, ,
1980, .422.

(12) セミョーノフ前掲書、62頁。

« »

« »

